

三河 アララギ

平成二十九年 2017年

九 月 号

第 六 十 四 卷 第 九 号



ニューヨーク日記(131) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NOREETUH

Blue Shoe Diaries



今ニューヨークでハワイアン料理がちょっと注目されています。スパムむすびばかりでなくオシャレなレストランでも。ミシュランレストランで料理していたシェフが自分のお店を持ったのがその中の一つ、去年開いたnoretuhって言うイーストビレッジのお店。モダンな感じで食べるまで味がハワイアンって気付かない感じ。面白くって甘さをうまくバランスするんだなあって思った。例えば、あん肝のトルシヨンも甘いハワイアンパンが付いてきたり。

Hawaiian food is hot right now in New York. And one restaurant that is getting a lot of attention is noretuh in the East Village. The chef and wine director are both Per Se alumni so you see high-end refinement in the dishes and approach to the food. One of the highlights for me was the monkfish liver torchon served with toasted King's Hawaiian bread. Nicely spreadable on the bread, what's described as passion fruit gelee tasted like mandarins to me. And highlighted by a sprinkle of karasumi or bottarga? That made the dish for me. Yum!

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

太秦も二日の春の花の雨やすらぎたまへまをとめとりすと
うずまさ

花鳥にあそぶあしたのひとときをみづから許し老い極まらむ

われにのみ言ひ得ることばもとめつつもとめ得ぬ日の過ぎゆくものを

浅くとも逃がすべからぬ言葉あり足腰弱りゆくこの日々も

たちそろひ極まる青のいきほひを夕ぐれながきときもわが見る

高山の岩根しまきて花白き伊吹たつなみは鉢小さくせよ

そろひたつ青羊齒群にわたる風夕べをゆらく老ならなくに

五つのうちただ一つだにみづからのうちなるこゑをあげて言はむよ

またひとり何ぞ手術にとらはるる巨き塔あり白くおそろし

うとまれつつ稀にあるひは親しまれわが頑かたくなをつらぬきて来ぬ

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵

御前岬ごぜんざきに夕日うすれて指し給ふ山松さわぐさるさゝとして

咲きしままあぢさゝの枝地に這ひて白き細根を持ちゐるらしき

大阪に共に来りて校長と話すは常の事務所のあれこれ

鹿の子編みに吾子の編みたるスーツ着て新大阪の駅に降り立つ

女教師の悲しみかたみに云ひ合ひて冷えは足より肩にまでくる

一にぎりの蕪菜を漬けぬ掌に青く染みたる荒塩つけて

冬の雷伴ひすぎし横なぐりの今宵の雨に雨漏りのせず

傾ける防潮堤に吹きつけてつもりたる雪ははだらはだらに

くれなゐの萎えたる花を三つ落しカニサボテンは今年花終ふ

池の面の今朝のうすら氷音たててわがそそぐ水に沈みゆくなり

歌集 「草々」

今泉米子

三百年伝はりてこし深井戸の水にわが齡よを生きつつぞゐる

草蘇鉄のみどりははやく乱れつつ一夏庭へ降おりることなし

竹竿に鎌を結びて切りたまへ椰子の太幹に宿る明治草

花咲かむ木草に蔭す芭蕉葉の風には裂けてひらひらとする

一椀の飯の間に昏れはてて芭蕉葉黒くしづまりにけり

台風の子報の風の草の中後れて白き薺茗荷の花

変りなく今日の夕べの飯了へぬ縁にスバルを見よという声

庭杉と楓の間を見よと言ふスバル見えたり眼あはひこらして

ふた足み足厨を出でて振り仰ぐスバルははやも西に移れる

衣被きぬかつぎ茄栗枝豆揃ひたり誰彼よりの頂きものにて

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

万葉の輪読おへて帰りゆく月かたぶきぬ松の梢に

広辞苑買ひしその日のよろこびをしるしおきたり扉の二行

施餓鬼会の五色の旗に仏の名細筆とりてつぎつぎに書く

五如来の小旗のかけに亡き母のおはしますごと経を吾誦す

盂蘭盆経誦す度毎にうかびくる吾が父母の遠き面影

御師僧の古き机と花莫塵を今も用ふる吾が部屋の中

新しき箆筒にならべて古びたる祖母の箆筒を吾が部屋におく

長闇堂の方丈の間にお茶会を了へし娘等のゑらぐ声する

真福寺の谷川ぞひに一人来て蕨を摘みぬ伯母はいまさず

独居の献立もなき明け暮れに保育給食の残りもの食ふ

青年

蒲郡 岡本八千代

訪れて我が目の前に立ちし人青年になりたるわが孫セイジ

有給休とりて来たよといふではないかなんと明るき青年の声

仰ぎ見る目の前の青年の立ち姿カンカン帽に黒ふちめがめの

青年よ「大志を抱け」とは言はず「小志を抱け」とせめて言ひたし

青年の強さの中にか弱さの心の動くわが孫セイジ

夜となれば小暗き庭にもムクゲの花白々として人来たるかもと

朝にも昼にも夜にも白花の今年のムクゲの花のあはれよ
あした

「そんなにもあなたはレモンを持ってゐた」思ひつつ描く一つのレモンを

己が沸かし己が冷ししこの淡き麦茶美はしと思ひつつ飲む

「妹が見し棟の花を見よ」といふ先生からの巻手紙出づ
あふち

河原撫子

東京 今泉 由利

過ぎゆきし四十八億年のありしこと今日の路傍の河原撫子

万葉へはるか宇宙へ誘^{いざな}ひて心に咲けるカワラナデシコ

薬用に食料にもなるといふ愛^{いと}ほしくしてカワラナデシコ

今をゐる人のごとくに会釈して行きも帰りも地藏尊菩薩

暮れなずむ音無川の川岸の隅田川へと流るる方^{かた}へ

釈迦如来座像となりゆく檜材とノンフィクションとに生きてゐる

子規庵の鶏頭の花咲きをらむけいとうの花描きてゐたり

黒を着る黒に落ち付く安らかに黒百色のなかの一色

整理摘果しのぎて育つ青柿を見あげて通る毎日の道

読む習ふことに思ひは至らざり積みあげてゆく漢詩教本

頼まれて

豊川 弓谷 久子

別名はザ・タカラヅカ・ジュランダの華麗な花房紫小花

暑いのに風邪気味とあり去年の日記今年も同じ日同じ事書く

さまざまの疑惑のニュース流れ来る政治を思ふ世相を思ふ

梨下の冠瓜田の靴と教はりたりき小学校の夏休み前

小柄にて童顔なりき弟の笑顔が浮かぶ今日は命日

今日の如くあの日も暑き夏なりき五十歳にて逝きし弟

頼まれる事は嬉しきブレザーの袖丈短かく直してやりぬ

夏祭りの季巡り来ぬ頼まれて今年も浴衣着せてあげたり

蝉時雨の朝となりたり梅雨らしき雨も降らずにはやも梅雨明け

灼熱の一日が過ぎしこの夕べ雨降り出したり二十日ぶりの雨

ヤブミョウガの花
豊川 内藤 志げ

今年の糸瓜を作るを迷ひをりひとり生えなる去年の畑に

青空もかい間見えたり真白なる雲もくもくととびゆく早さ

藪沿ひを行き帰りして涼しき径上野の坂の風通る径

一箱に葉ボタンキャベツブロッコリー秋の野菜の試しまきなり

袋には発芽温度は二十五度涼しき所と家敷をめぐる

家事一切を嫁にまかせし五十年松葉杖つき帰り来たれり

わが気配に低き水より翔び立ちぬ羽根の模様斯も美しくし

中井さんの好みにあらん藪かげに真白の粒々ヤブミョウガの花

藪かげに植ゑたる様に揃ひ咲く真白に段なすヤブミョウガの花

吉祥山の方に湧き出づ積乱雲高く輝き散歩の径に

雑歌

岡崎 林伊佐子

土に生きる楽しみありて朝早く畑に立ちて深呼吸する

夏の日の隈なく吸ひて温もれる土の臭いに心やすらぐ

ふる里の梅の実漬けて一日に一粒は食む亡き姑の味

試作する西洋野菜も自然なるままに育てるわれの菜園

茄子の葉に猛暑をさけて動かざる天道虫の命をおもふ

免許証を返納してより老い夫も不便となりて家にこもりぬ

ふる里の廃家にとまり裏山の杉の木の間に月たてる見ゆ

ふる里を飽くなく歩み野に山に四季の野花を見るは楽しき

白米を濯^あう量目も減りてきぬ三合^あたきて二日も食べる

朝あさに老いるな老いると言ひながら歩きし夫は健脚となる

初夏

豊川 安藤 和代

木の枝を撓ませ雀賑やかに初夏の空へ飛び立たんとす

朝末き野は草刈機の音響き草の香強く夏に入りゆく

すかし百合アマリリス等見事咲き楽しみ楽しく早起きとなる

夕陽受け光る枇杷の実集団で屋根に鶉ねらっていたり

久の雨豪雨となりし日のテレビ少年の将棋連勝ながる

ダリアの葉の陰にひっそり青蛙目をとじ口閉じ暑さに耐えおり

真昼間の賑やかな蝉の声眠り最終列車のかすかなる音

夕暮れて青田にうもれ白清しサギの頭の動く事なし

緑濃き弓張山脈背にして梨の袋の白きが光る

あかときの窓に雀の賑やかさ元気をもらい結ぶエプロン

オレガノの花

沼津 鈴木孝雄

海岸の大きなハマユウ白い花彼方に広がる青い海原

待望の雨が雷伴って前線追いやり梅雨明け間近

雷鳴は山の彼方に響けども雨は沼津を避けて通りぬ

やっと雨この機逃がさんとニンジンの種を蒔きて不織布覆う

穫れ頃を待ってたトマトが尻腐れ慌てて散布カルシウム塩

この間摘み取ったのにヤブカラシちよこんと芽を出すゾンビのように

オレガノの花の蜜吸うタテハチョウウシジミチョウにアオスジアゲハ

ぬかってたラディッシュの芯に幼虫がピンセットで摘まみ捕殺す

タマネギの畝のためにと鋤入れる半間も行かずに息はや切れる

バジルの葉を揺すってバッタを追ひ払うお札にくれる爽やか香り

菜園

春日井 清澤 範子

八十六歳夫は足腰しびれあり暫し忘れて菜園頑張る

吾が夫は本を見ながら菜園に西瓜植えたり今朝初めての受粉

受粉して三日目になり成り花開き声はずませて吾を呼ぶなり

腰痛をかばひながらも菜園に西瓜トマト植えて楽しむ

園芸店にて西瓜ビーマンナストマト苗を買ひたりしつかり根付く

夫の寝顔暫し見つむも姑の顔そっくり見たり額の丸し

採血し検査結果は異状なし吾副作用の足はもつれる

かかりつけ医にて血液検査異状なし未だまだ頑張る主婦の仕事を

応接室にて冷気を浴びて過すなり三人でみたり団だんらん樂しい時間

学校が夏休みに入り学童がわが家の前に居なきは淋しき

真(まこと)はどっこに 大阪 伊藤忠男

「をちこち」の風情楽しむ両口屋香り元禄今様の味

難問に合えば合うほど輝く目これぞプロなりプロならばこそ

頬撫でる風とせせらぎ柳岸並ぶ酒蔵麴の香り

黄桜に月桂冠の蔵なれど伏見は今も寺田屋の街

冷やし飴冷やしスイカにかき氷まだある我が家冷やしソーメン

蓮の葉をかざし雨よけ縁台の将棋に夢中良きころの夏

天窓の曇りガラスを打つ雨に心寄せるは落ち込みの時

初恋の友と会えるか久しぶり過ぐる月日が憧れを増す

一分の閉じ目回復目の疲れ見えすぎちやうも良し悪しなり

嘘だとして丸く治める方便も時と場合と心得るべし

虎の尾

東京 森岡陽子

紫陽花の花の数ほど並ぶかさポツンポツンと相合傘も

雨上がり闇に皓皓梅雨の月ほんの一瞬雲の間々より

都議選と半夏生の日曜日梅雨の合い間の空ギラギラし

木槿の花ひらかぬ間々に蕾落つ根方につもる八つ九つ

水田は緑一色夏田んぼ畦道からは牛蛙の声

夕立に走り飛び込むカフェには一瞬間で満席となる

友人と愛犬話しに盛り上る写真見せ合い互いにほめ合う

九州の豪雨被害に胸いたむ家屋に流木やまと留まる

崖に咲く虎の尾花の群生は同じ方向き白い花並ぶ

華やかな花火大会玉屋の掛け声牡丹の大輪夜空に開花

平和を

横浜 阿部 淑子

アララギの八月号の百合の花猛暑に勝てと励まざる師よ

百五歳天に召されし先生は生き方教え平和を願いつ

声出して息長く吐く呼吸法身に付けゆけばこれぞ長生き

傍^{かたわ}らを走り過ぎゆく若者の後姿に祈る安全

ゲリラ豪雨あちこちの道路^{みち}川と為す自然の驚異は予測もつかず

菜種つゆ

東京 足立 晴代

庭の梅丸々太りすこやかに今年も降る雨何のその

菜種つゆ続く長雨きれめなくつゆ来たりしはいつの日からや

藤の花長房池に影おとし皐月の空に鯉も元気に泳ぐなり

五月空父母の鯉元氣よく子供うれしげ高く舞うなり

すこやかに過せる日々に感謝して我が身を守りすこす日々なり

家族婚

豊川 白井 信昭

坪庭の中にはや花は秋桜こすもすのひとつ小さく赤紫色

わが村の消防所前日陰なす柏の若葉の季節来たりぬ

舗装路のつぎめわれめに雑草の根は生えくるや音羽川堤

今日咲くか明日には咲かむと生け垣に眼差し注ぐ幼翬あすなろ

生け垣に後ればせながら一株の紫陽花の蓄うす緑色

ま近かにも伊良湖水道船見ゆる白い灯台今も昔も

屋上に伊良湖の島辺遠々と初夏の光の中にかすめり

教会に新郎新婦の晴れ姿両家揃むたりいて六人の挙式

厳おごそかに初夏の光に包まれて祭司をはじめ賛美歌を歌う

はからずも両家三人みたりつつ会席に伊良湖岬の海見える部屋

七回忌

蒲郡 杉浦恵美子

五六月充実していた我が暮し四月は忘れたその前臚

水瓶の小さき世界にも異変ありメダカが減ってそして増えてる

七匹のメダカのうちの赤が消え黒き小メダカ知らぬ間に居る

今は我石樽峠をドライブすくねくね旧道横目にしつつ

夫と共に越えし難所は瞬く間過ぎて仕舞ひぬ石樽峠

夫居らば避暑にも行かむと云ふかしら容赦ないほど灼熱の日々

夫居ねば暑さを訴ふ相手なく籠りて過す炎熱の午後

せめてもと酸漿の鉢求めたり江戸風鈴のおまけの付いた

我が家から徒歩と電車を乗り継いで武豊駅に降り立ちにけり

いざ行かん美浜の海のカレー屋はスリランカ式パイナップルカレー

日豪

豊川 山口千恵子

明日の朝オーストラリアに発つモモ子日程表を渡して行きぬ

日豪の教員交流事業にてこの夏休みを彼の地に過すと

フウランの真白き花はな咲きにけり梅雨空続く朝氣付きぬ

細き莖に小さき七つの白き花フウランの花は咲き続けりぬ

保健センターのミニドック受け帰り来ぬ正常値に近き今日の血圧

庭木より採りたる梅の実漬け込みぬ染まりてをらぬ紫蘇の紅色

透き通る梅シロップのでき上り氷を浮かべて薄めて飲みぬ

玄関の柱に爪とぐ野良の猫そのささくれを触り憎めり

スーパ一のレジにアルバイトするヒナ子しばし遠目に見てゐて帰る

一日の間に太くなりたる胡瓜挽ぐしっかり棘とげ手に感じつつ

朝のこもこも

豊川 夏目勝弘

富士山は溪谷なきゆゑ美しと我も諾ふ朝の目覚めに

富士山は水を司る神なると朝の目覚めに閃きにけり

湖の上に聳へ坐せると思へるまでに絶えざる清水せすい

蛇口よりの水音を聞き何故かトイレに行きたくなりてきにけり

洗物に溜りし桶の汚れ水シンクに消えゆく大きな音して

ゴミ袋を両手に提げて未だまだ深く眠れるネムの木の下

日の出より一時間の過ぎにけり開きしネムの葉いまだに半ば

少しのみ開けある網戸を通りくるジャスマンの香の今朝は強しも

群落をなせるまでに残したるキキョウソウに群青の小花

雑草と抜き捨てられるキキョウソウ我が庭なかの花園となる

歌集 「夢のつづき」

水上信子

花びらを伴いて降る雨あしに桜の枝の重なり揺るる

花見客の傘は花びら模様なり雨にまじりて桜散る散る

薄闇にゆるる炎の色妖し野焼きの空のオレンジに映ゆ

三国志が今の暮しに生きる街曹操の像誇らかに立つ

空海の事跡残れる北宋の古都に愛媛より寄贈の像あり

中国の弥勒菩薩は肥満にて胡坐姿でふくよかに在り

風鐸の音涼やかなり古さびし鼓楼に立てば暑さを忘る

大黄河対岸は見えず滔々と流るる岸にひまわりの咲く

長江より温故知新の旅重ね黄河の岸に今日のわれあり

蘊蓄を傾けあいつつ酌み交わす夜の円卓旅は楽しや

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

ささなみの志賀の唐崎ささき幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

楽浪之 思賀乃辛碯 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津(①三〇、柿本人麿)

(口訳) (ささなみの) 滋賀の唐崎は、昔と何の変ったところもなくあるけれど、今はもう昔の大宮人達が船遊びしたその船をいくら待って居ても待ちうける事は出来ないのだ。

柿本人麿が近江荒都を過ぐる時詠んだ長歌の返歌である。「ささなみの」は近江滋賀郡から高島郡にかけて湖西一帯の地を広く称した地域名で、志賀以外にも大津・比良山・連庫山等に冠している。原文「楽浪」は正確には「神楽声浪」(⑦一三九八)と書いた例があり、「神楽声」を「ササ」と訓むのは、神楽かぐらの囃言葉にササと言ったところからの戯訓である。「神楽浪」(②一五四)と書いている例もある。和名抄の地名にも「楽前」(但馬国気多郡)を「佐々乃久万」と訓んだ例がある。一首、志賀の唐崎に対して擬人法を以て詠んで居りながら、少しも軽薄でなく、重厚な調べを成就している。

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

いそぎゆく大山蓮華に似たる女ひとその母の辺つほみに蕾を届けむと

ジャスミンのほひひろがる昼下がりが近所集ひて花談義頻り

水野 絹子

梅雨入りの声はすれども降りもせず水やりに向かふ我らの日々有り

待ちかねし梅雨の一雨降り来しに嵐のごとき風となりつつ

牧原 規恵

紫陽花のむらさき匂ふ今朝の雨ああ友逝きて六たびの夏が来ぬ

わが幼今日は小さきアスリート銀盤に舞ふを隠れ見てをり

稲吉 友江

「慶世羅々々」川喜田半泥子の軸の前いつまでもわれは見えてゐるよ

六月のフランクフルトの風優し菩提樹の下夫と歩めり

鈴木美耶子

幼よりわがバースデイのプレゼントに人気の「ここたま」手作りの品を

十階の幼ら暮す窓越しに今日はスカイツリーを我は見えてをり

吉見 幸子

このひと日父の命日暮れゆきぬメール来るのみただそれだけに
国念ひ家のためにも生き逝きし己のありし軍人の父

牧原 正枝

雨乞ひか蛙の鳴き声とぎれつつ眠れぬ夜半のとき刻みゆく
研究に医療に励みし人生を君は卒寿となりて逝きなき

石田 文子

モネ飾る箱根ポーラ美術館出でて歩めば心たること
ここがかの江戸守りたる箱根の関見下ろせば静かなけふの芦ノ湖

森 厚子

友からのたよりに俳句はじめたと君も仕事をしりぞきしかな
「ネギはもう送れないよ」とやはらかき声にて従妹はぼつりとひとこと

山崎 俊子

石割の発破の音が聞こえこし嗚呼あの頃の西浦恋し
ついと翳^{かき}しすいと出でゆく乗客ら自動改札は私には謎

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

旋盤工^{せんばんこう}にじみ出る汗耐えながら極上作品ここに誕生

群馬県立太田工業高等学校二年

岡ノ谷^{おかや}怜^{れい}椰^や

旋盤中友の視線が突き刺さる巧みな技は今日も止まらず

群馬県立太田工業高等学校二年

熊谷^{くまが}一^{かず}稀^き

どうしても言いたいことがあるけれど「あのね」で止まるこのもどかしさ

深谷市立岡部中学校二年

黒澤^{くろさわ}日^ひ南^{なみ}

忘れない君に言われた「好きです」を「寿司ですか?」なんて間違えた僕

埼玉県立春日部高等学校一年

初^{はつ}谷^や陸^{りく}斗^と

オバマ氏と被爆男性抱き合った青空の下平和の誓い

埼玉県川越女子高等学校一年 大川 早紀^{のき}子^こ

おもしろい友とメールで「笑」の文字それ打つ自分笑っておらず

埼玉県川越女子高等学校 高尾みずき

ありがとうその言葉は言えなくて怒ってごまかす母との会話

埼玉県立坂戸西高等学校一年 鈴木 舞^ま衣^い

土曜授業いつも見に来るうちの祖父今じゃすっかりクラスの一員

埼玉県立松山女子高等学校二年 長嶋 凛^{りん}

私の一首

周遊の春爛漫うらんまんの桜道レイクサイドウェイは湖の上に

白井信昭

浜名湖の周遊するR362（本坂通り）が猪鼻湖と分岐する道がレイクサイドウェイです。

桜の花が盛りに咲く中、湖の上を爽快な気分で行きぬけた。

打ち上げの花火散り行くきらきらと星屑となるきらきらきらと

森岡陽子

今年も府中の花火祭りに行く。此処ならではの打ち上げや仕掛け花火の有る大変ユニークな祭りである。距離が近く風向きで真黒なカスが降って来る事がある程。日本の花火師ならではの打ち上げ花火の一つが大きくひらいたまま、きらきら〜光りながら落ち消えて行く。それはそれは見事でプラネタリウムの天井を見上げている様であった。一瞬に消える儂さも魅力であるが、光りながら散る花火も又夜空に美しい。

千億年先のことまで知らずとも今日は知りたり宇宙の未来

今 泉 由 利

この頃よく思う。近い将来、自身が存在しなくなるということ。思ってはみるけれど、どう対応したら良いのか皆目わからない。そんな時、電波望遠鏡というものにより、今から、すなわち私から千億年も離れた宇宙の姿、時間と、距離と、様相と、すごいスピードを伴うとか…、膨張してゆくとか…。

もう、自身の頭で考えることをやめ、電波望遠鏡の範囲を楽しむことにしよう。そして、自身に確かなことは、自身に責任をもつ…と結論にしてみた。

童謡 「汽車つて スゴイナ」

高橋育郎 作詞

一 汽車つて スゴイナ

でっかくて スゴイナ

白いじょうきを シユーツとはいた

出発進行 動き出したぞ ワーイッ

ポッポッ

ガッタンゴットン シユツシユツシユツ

二 汽車つて スゴイナ

ちからが スゴイナ

黒いけむりを もくもくはいた

信号は青だ 走って行くぞ ワーイッ

ポッポーツ

ガッタンゴットン シユツシユツシユツ

三 汽車つて スゴイナ

夢があつて スゴイナ

けむりのわかは 夢のわかだ

未来へ向かつて 飛んでるようだ ワーイッ

ポッポーツ

ガッタンゴットン シユツシユツシユツ

『俳句』

桐一葉水面の空を揺らしけり

山元正規

逝く夏や峰藪ひたる雲の群

両隣の道にも水を打ちにけり

山迫京子

本堂の読経に混じる蝉時雨

緑陰の椅子は丸太のカフェテリア

森岡陽子

一時も力抜かずや蝉時雨

にわか雨流れて埋むる蝉の穴

田中清秀

白鷺の一羽埋るる青田中

打水や猫背の父の遙かなる
七夕に託ちて友と酌む夕べ

重野善恵

漢詩本幾冊積みぬ夏安居
半分が宿命であり半夏生

今泉由利

雲早き秩父連山遠雷す
定刻にバスを降り立つ夕焼かな

米田文彦

打水の路地の匂ひや神楽坂
打水や風呂水播きし頃思ふ

柳田皓一

ポケットにキャラメル一個梅雨じめり

植村公女

逃げ水や私のなかの水留り

若者の葬見送りぬ青嵐

青蔦や蔵の二階に小さき窓

今泉如雲

白南風や丈六尺の紺暖簾

本州の北端にゐて大西日

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

湖水から出現したり雲の峰

投出した足の先なり雲の峰

風あるを以て尊し雲の峰

夏山やひとり機嫌の女郎花

衣かへて座て見てもひとりかな

田の人を心で拝む昼寝かな

山水に米をつかせて昼寝かな

神風の吹や一夜に酒となる

かさね吟行会

「哲学堂公園」 七月

田中清秀

哲学とは何のことだろうか、「物の本質とは何かを考へること」と言われ、また、哲学的な思考とは「そもそも私とは、そもそも生きる意味とは何か」など論理的に真理を解明するプロセスでもある。ソクラテスやプラトン、カントやヘーゲルなど著名な哲学者の名前は広く知られている。日本には明治の初めに西周（にしあまね）がフィロソフィを知恵と愛するの意味の希哲学と翻訳し、のちに世界・人生の根本原理を研究する学問として哲学と定められた。今回のかさね吟行会は趣向を変えて中野区北部にある「哲学堂公園」を散策した。

平成二十九年七月十四日、中野駅に十一時集合し、先ず商店街にあるビストロで昼食を済ませてその後バスで公園に向かう。ここのランチメニューはビーフシチュウで、これから行く哲学の世界に相応しい西洋風料理であった。

哲学堂公園は東洋大学の創立者で妖怪学者としても有名な井上円了が明治三十七年に精神修養の場として開設

した。併せて円了の思想を体現した空間でも有り、この公園に設けられた幾つかのスポットには妖怪になぞられたものがある。例えば正門の哲理門（通称妖怪門）には門の両側には天狗（物質）と幽霊（精神）の彫刻が置かれている。宇宙館近くに植えられた幽霊梅は、もとは駒込の自宅にあつて幽霊が出ると思われた代物である。それでは哲学関を潜り抜け広い豊かな自然に囲まれた幻想的な「哲学」の世界に早速足を踏み入れよう。

炎天や木々の騒めく哲学堂

しのぶ

木々ゆるる風音涼し哲学堂

皓一

知らざるを知らざると知るチキタリス

由利

この公園のランドマーク的存在の六賢台には東洋の賢人聖徳太子・菅原道真・荘子・朱子・龍樹・迦毘羅が祀られている。公園の中心に設置された三層六角形の最も目を引く赤い建物である。並ぶ四聖堂は最初に建築された建物で孔子・釈迦・ソクラテス・カントを奉祀しており堂内には釈迦涅槃像が安置されている。また、円了が全国巡講した際の揮毫の記念と筆供養のために建てられた筆塚（字を書きて恥をかくのも今暫し哲学堂の出来上がるまでと記載）とその対としての硯塚も園内に作られ

ている。

木洩れ日にすつと筆塚夏の風

陽子

硯塚筆塚もあり庭石菖

さち子

賢人像夏日を浴びて直立す

礼子

園内には七十七場の哲学に由来するユニークな名前の建物や石造物、通路などが霊化して点在する。鬼神窟、懐疑巷、神秘洞、絶対城等様々である。中でも狸灯（お腹に光を仕込む狸の灯籠）と鬼灯（灯籠の火で苦しむ鬼の灯籠）は唯物と唯心の人生観を表現していると言われる。また、公園中央の平坦な広がりさえも時空間と呼び哲学の時間と空間を表している。

哲学を悟りし如く蟬の声

京子

時空間のぼる哲学堂の蟻

正規

何とも摩訶不思議な哲学の世界の連続である。髑髏庵というのは肉体の死を意味するものではなく、世間の俗塵にまみれた心をここで消滅させ骸骨をもって俗心の死を表している。今回の句会はこの髑髏庵の鬼神窟と呼ばれる和室で行われた。

玻璃戸越し木の間に覗く夏の空

素山

霊府めく狭き廊下や風涼し

清秀

俗界を離れ霊的な洗礼を受けた感性を持って俳句作りに挑む、囁目三句いつも通りながら一味違う秀句ができ上がる。

追記、松が丘に位置するこの公園は古くは源頼朝の重臣和田義盛の居城であり、茶畑と富士山が望まれる武蔵野情緒が残る景勝の地。今では地域の人びとに四季を通じ愛され親しまれており、難しいことはぬきにしてのんびりと散策するのもきっと楽しいだろう。特に春の桜は素晴らしいと言う。

■かさね吟行会■

日時 九月八日（金）

場所 寺家いなか村

集合 田園都市線青葉台 十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（六五）

丸山酔宵子

『アルチンボルトがやってきた・・・』

「これが、ジュゼツペ・アルチンボルトの「ソムリエ（ウェイター）」です。」25年程前、ロンドン クリステイーズの倉庫で学芸員から大きな古ぼけた油絵を見せられたのである。「これが、ハプスブルグ家マクシ三リヤン2世が従兄のフィリップ2世に贈ったとされる幻の名画で、富豪ユダヤ人から持ち込まれました。」

まだまだバブルの続く1995年頃、大阪は関西国際空港の建設や大阪湾の埋め立てによる南港一帯の開発など、東京に追い付けと大阪復興を目指し、大変活気にあふれていた。その当時すでにユニバーサルスタジオ（UJ）誘致も計画され、大阪市特に大阪市港湾局は飛ぶ鳥を落とす勢いであった。（因みに、大阪市の異常な乱

脈ぶりを指摘して、彼の大阪維新の橋下徹はその反動としての登場であった。）

そんな折、大阪市港湾局は大阪港の国際姉妹港であるル・アーブル、サンフランシスコ、バルパレイソ、上海、サイゴンとの国際交流促進施設「ふれあい港館」を南港に計画。その核心施設としてフランス ル・アーブル港との交流を記念して、「食い倒れの大阪」に相応しく「ワインミュージアム」が建築されたのである。

ミュージアム正面に続く長いエントランス両サイドの高い急斜面には、カベルネ・ソーヴィニヨンやシャルドネなどの葡萄が植えられ、夏にもなると青々とした葉っぱが大阪南港の強い日差しを浴びキラキラ輝いていた。秋ともなると収穫祭まで行われていたのだ。

ミュージアムでは、オール・アバウト・ワインを映像やジオラマを駆使し、ワイン造りのこだわりの道具もふんだんに展示。更に、ミュージアムのメインレストランとして本場パリ「ボファンジェ」を誘致し、ワインやグ

ルメ食品のマートまで運営したのである。そのような状況の中で、「ふれあい港館（ワインミュージアム）」の目玉として「アルチンボルト ソムリエ」を熱望していたのである。

ジュゼッペ・アルチンボルトは、16世紀後半、ハプスブルク家の宮廷で活躍したイタリア・ミラノ生まれの画家で、果物、野菜、魚や書物で、奇想天外、寓意的な組み合わせで巧みに肖像画を作り出してきたのである。

ロンドン クリステイーズ本社で初めて見た時は、ワイン造りに関わるあらゆる道具（樽、樽栓、計量器、栓抜き、グラス、ボトル等）を使い「貴族の肖像」とは判別できるが、色褪せ薄汚れた感じが、第一印象であった。しかし、ルーブル美術館御用達の専門家によるクリーンアップと特製額に入れ替えると、アルチンボルトの正式署名まではつきりと浮かび上がり、見違える素晴らしさ。世界的なアルチンボルト研究家の証明書など諸経費も含め、数千万円と非常にリーズナブルな価格で落札した記

憶がある。

この度の国立西洋美術館「アルチンボルト特別展」（6月20日～9月24日）では、最終コーナーベストポジションに、唯一日本現存アルチンボルトの傑作として誇り高く展示され、なお一層の輝きとオーラを放っている。因みに、今購入するとすれば、購入不可か、数十億円でなければ購入できないのでは・・・？

海青し葡萄眩しい港館

酔宵子

本からのあれこれ (22) 米田文彦

「サトさん」

越中富山のある家を興隆させたと言われる女性、三代目当主のサトは（届出された名前が「郷」、しかし名前を自筆しているメモには「サト」とあるので、ここではそれに従う。）弘化三年（1847年）に生まれ、昭和六年（1931年）に八十四才で亡くなっている。

弘化三年といっても今では良く分からないが、明治元年は1868年。その二十年ほど前の生まれである。

サトが生きた時代を元号で書いてみると、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、明治、大正、昭和となる。天皇一世に元号一代の制は明治から、幕末から明治維新の頃は日本の正念場の時代であったとはいえ、随分と元号を変えたものである。

さて、サトの生まれた家は、祖をたどると新田義貞に従った武士だったとされる旧家である。結婚は明治の初

め、男の子を生んだ。しかし、その子は成人して結婚、女の子（名を國という）の親にもなったが三十歳前に急逝してしまう。コレラの流行した年だったという。

数年後には夫（二代目当主）も亡くなり、サトが三代目として家督を継がざるを得なかった。明治三十一年、そのとき既に五十一才であった。

当主になって三年後には、亡くなった息子の嫁に婿となる養子を取り後継者を決めている。この後継者、即ち四代目には男子三名女子二名の子供たちが生まれたが、すべての子は養子および分家として出され、五代目は國の婿とした養子とした。なかなか複雑に見えるが筋を通して家を継承させている訳で、後の関係者からは、この流れを決めていけたのはサトしかないと判断されている。

個が尊重されるいまの時代感覚からすると、これほど「家」というものを尊重する考え方はどうなのか？という見方は当然あるのだが、当時は、商売する家はイコール企業、多くの従業員・家族の生活が懸かっていると、側面が強いことも考慮する必要がある。

業容は拡大し、神通丸という立派な船も新造された。この船に対する船頭たち、船大工たちの思い入れは強く、後には正しく縮尺された模型を作成して展示したほどである。サトは、女はバイ船には乗船不可とされていたにも拘わらず大阪まで船で行き商売を拡大、北洋にチャレンジ、売薬にも手を広げている。

現在では、サト個人の人柄を示す資料はあまり残されていない。しかし、状況から見て気性の強い決断力に富んだ女性と考えるのが自然であろう。

この時代、明治三十年頃の政界は第一次大隈内閣、東京専門学校は早稲田大学と改称されている。大隈重信は退陣後地方遊説を頻繁に行っているが、北陸を廻った際にはサトの家をも訪問した。そして、大正三年に第二次大隈内閣組閣の際に、サトから大隈夫人綾子に出したお祝いの手紙が早稲田大学図書館に保管されている。

文面、書体を見ても誠に立派な祝い状となっている。また、大隈宿泊の際に貰ったものではないかと推測するのだが、立派なペンとノートが箱入りで残されている。ペンは二十センチ程度のアルミの軸、ペン先は当時のこ

とで差し込み式になっている。

どのような交流があったのかなかったのか、今では知る由もない。

また、その翌大正四年、サトは町議選挙に投票を行った。当時、女性参政権はないから投票は出来ないのだが、例外として戸主であり更に納税額が三番目以上であれば女性でも投票できた。(後に法改正によりまったく投票は出来なくなる。出来るようになるのは第二次大戦後まで待つ)そうはいつでも実際に女性が投票行動を行うことはほとんどなく、高知県にあった例とサトの場合とどちらが早かったのか、という程度であった。

他にサトの資料としては、小学校修身の読本に記載のあるものがあるが、ここでは、東京にいる孫に与えた本願寺富山別院本堂の落成記念品(小型の阿弥陀仏)を紹介しておく。縦七センチ横五センチの薄い桐箱に入った仏の下に、大正三年一月サトと書いた薄い紙が二枚入っている。なぜ二枚なのか不明だが、女性活躍の黎明期、地方にこういう女性がいたという話として以上、留めておきたい。

ある自然科学者の手記 (64) 大橋望彦

〈鹿彫りの気持ち〉

十年程前には、我が家の庭にも夜となると、狸やキツネがちよろちよろと遊びに来ておりました。それも今は、周りの道路が舗装されると共に、何時しか陰を潜め、山の奥に往ってしまったようです。奥多摩では、鹿はその数が増え、畑や山の木の樹皮を食べてしまい、害獣扱いされております。中国では「幸福を呼ぶ鹿」として、大切にされ、奈良でも神使鹿として大事にされています。なんとも遣る瀬無い気持ちになります。せめて、鹿の魂が、何とか言っているよ・・・と、思いつつ、いろんな鹿の姿を彫っています。

「逆転の発想」からこんなこと考えられないかなあ。

奥多摩の町が助成金を出して、奥多摩にいる鹿に全て餌付けをし、沢山餌を食べさせる方策を執る。当然、鹿の数は増えるでしょう。でも、里の畑や山の木をかじつ

たりしなくなるでしょう。そして、街の中は鹿だらけになってきます。それから先の生態圏の変化を考えて見ましょう。

鹿の数は当然増え続けます。餌付けの餌が不足すると、畑も荒らされたりします。それでも助成金を出して餌を豊富に与え続けます。町の中でも鹿がウロチョロするようになり、交通渋滞を生ずることも、屢々生じます。夜間の国道は危なくてスピードを出せません。其れにもめげずに、町の餌付け場では、一定の時間に音楽を流し、餌を与え続けます。沢山の鹿が山から下りてきて、餌を食べて帰ります。鹿は夜行動物ですが、奈良でも見られるように、昼間でも餌をねだりに行動する鹿も多くなります。或いは昼間に街中で昼寝したりする姿も見かけるようになります。これは、観光材料として、利用されるようにもなります。秋の紅葉に鹿は、正に格好の風情となります。其れから先が問題です。餌は当然増やして与え続けなくてはなりません。鹿の数は増え続けます。其れは無限に増えるのでしょうか。何時しかMAXIMUM (上限) があるとしたら、何が要因となって限界に達

するでしょうか。この限界要因を知れば、共存を上手くコントロールすることが出来るようになるのではないのでしょうか。これは、科学的に解明しなくてはならない大事なテーマであります。其れこそ、世界中の注目する社会研究ともいえます。エコと言う言葉が節約と訳された

りしていることを見かけますが、これはそもそもエコロジー ECOLOGY の略語であり、生態学のことであるのを考えて欲しいのです。緑を増やし、植物の炭酸同化作用によって炭酸ガスが光のエネルギーを使って、酸素を形成し、空気が綺麗になる。この植物をどんどん切り倒し、近代科学の生産物に化していくことが、生態圏を変化させてしまい、地球の崩壊に繋がるといふ問題意識が、エコでの最も深刻に考えなくてはならないことなのです。共存する世界を考えることが、今我々には必要なのです。エコを考えると言うことはこういうことです。ただ鹿を害獣だから殺して、数を減らせれば事が終わると考えることは、とても easy (安易) な考え方であると言えます。さりとて、鹿を野放図に増やし続けさせ、其れこそ生態圏が極めて偏った状態になってもよ

いのでしょうか。天敵を用いる方法も、昔はよく考えられました。でも、図らずも、その天敵が増え過ぎて、その駆除に苦勞している事例も沢山あります。このバランスが保たれるようにすることが、エコで考える中心問題と考えるとよいでしょう。

問題を元に戻しますと、科学的解決に対しては、其れを専門としている動物生態学者は数多く居られます。是非、この問題に答えを出して欲しいと思います。

28 都道府県が策定する鹿の保護管理計画の多くは、「増え過ぎず、絶滅もしないように管理すること」という方針である。言うは易しく、行うのは極めて難しい方針である。鹿の棲息生態として、環境生態に著しい影響を及ぼさない棲息密度は、1平方キロメートル当たり5頭以下であるが、そのような状態には中々ならず、次第にその数が増えてしまうのが実情のようだ。

絹の話 (82)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

「繭から絹糸作る五つの方法」

先人たちは野にある色々な繭を知恵を絞って糸にして来ました。その中でもカイコガ科の家蚕が最も糸が揚げやすく、5千年も前に昆虫の家畜化を成功させ、富岡製糸所に代表される様に絹糸が工場生産できる様になりました。家畜化されていない各種野蚕は繭の種類によっては紬(紡)糸しか採れないものもありますが、今でも糸揚げは熟練した人が1粒ずつ行なっています。

それでは繭からどの様にして糸をとって、どんな種類の糸が出来るのでしょうか。

生糸(きいと)

お湯の中で繭を煮て湯気と一緒に上がって来た糸口から1本の繊維を引出し(現代の繭から1500m)、それを何本か引き揃えた物が生糸といわれるものです。

生糸には表面にセリシンというニカワ質の蛋白質がついていて、乾燥するとガサガサして麻の様ですが、精練の仕方です。シャリシャリにも柔らかくも千変万化させる事

が出来ます。

生糸の糸の太さはデニールで表示されます。

1デニールは9000mの長さの糸が1gを言います。

21D(デニール)の糸は21中と表示されます。

蚕から吐糸される糸は吐きはじめは太くて次第に細くなるので、幾つかの繭を合わせて1本の糸にすると目視では分かりませんが全体として不均なので「中」を付けます。この表示は合成繊維など長繊維の全てに使われています。

玉糸

繭の基本は1頭が一つの繭を作りますが、時々二頭が一緒にあって1粒の丸形をした大きな繭をつくります。これを玉繭と言います。

この繭からは2本の糸が絡んで節ができ、きれいな糸が揚げられません。この糸は玉糸とよばれシャリタン等の節のある絹織物に利用されて来ました。以前豊橋はこの玉糸の産地でした。

真綿

玉繭や生糸を揚げるのに不適當な繭(大きさの揃わない、変形等)をアルカリ溶液などで処理して、セリシンを除いて柔らかくした繭を平板状に引き延ばしたものが真綿です。

本来「綿」いえば絹綿の事でしたが、絹より後に木綿の綿が一般的になり、木綿と区別する為に絹綿を「真綿」と云う様になりました。

真綿は昭和40頃までは全国どこでも布団地と綿の滑り止めと保温の為や、襦袢（どてら）の保温と綿切れ防止に使われてきて、現在もその事を知る人は大勢います。現在は紬糸に利用されています。

紬糸

真綿を引き伸ばしながら手でつむいだ糸や精練した屑繭から足踏み機などの道具を使って作った糸を紬糸と言います。

現在は織物の創作作家さんが緯糸に入れて一味付けるのに利用されたりしています。

生糸が正式な絹糸とされているので、紬糸は屑糸などが使われるため、どんな高価な品であっても正式な場所には着て行く事は控えた方がよいと言われます。

絹紡糸

生糸を製造する行程で出たくず糸や屑繭を精練して綿にし、長短不揃いな繊維を一定の長さにカットして機械で紡績した糸を絹紡糸と言います。

絹紡糸は精練の程度により、半練り、七部練り、本練

りの区別があり、繊維長が長いものほど価格も高く、生糸に近い価格の物もあり、銘仙や富士絹にも使われました。綿や麻などと混紡にも利用されています。

絹紡糸の糸の太さは木綿などと同じ様に番手で表示されます。番手表示は重さを一定にしてその長さで糸の太さを表示するもので、デニールとは逆に数値の多いものほど細くなります。

絹の品質表示

絹の品質表示は上記のどの方法で作られても『絹』です。ので、購入する時どの様な絹素材で作られたか、販売員に聞いてみる事も必要ですが、残念ながら専門店以外、店頭での確に應對出来る所は殆どありません。

また、洋装としての絹専門店も殆ど無いのが現状ですが、呉服屋さんが絹の知識は豊富です。絹製品は生糸で作られた物が絹紡糸の物より高価な物が殆どです。

しかし生糸で作られている物の方が絹紡糸の物より柔らかい様でどこかシャリ感があり、麻と間違えられる事が時々あります。絹紡糸はあまり腰がなく柔らかで、太番手の屑繭織物などは木綿に近い感触で、艶もありませんが、一般的にはシャリ感のない絹紡糸の方が柔らかいという絹のイメージに沿っているようです。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 七十二回

「月虹」 鮫島 満

二十 扇畑忠雄 3

我聞くは呪文の如き茂吉の一言「蝶なんか歌に詠むこと勿れ」

「短歌朝日」平成十一年
甘美なる抒情否定の禁忌とも茂吉は「蝶」を除けたりき

歌集よりわが拾ひたる「黄蝶ひとつ」茂吉でも作つてゐたではないか

門下にして記憶に残すことのできた貴重な証言である。「蝶なんか歌に詠むこと勿れ」は、茂吉が心がけていたことであろう。特に若い歌人には「甘美なる抒情」に流れやすい蝶をしりぞけて落ち着いて写生に徹してもらいたいという気持ちが強かったのであろう。

作者は三首目で、茂吉に蝶の歌があることを知って驚いたと詠んでいる。その茂吉の歌は、

黄蝶ひとつ山の空ひくくの翻る長き年月とどきかへりみざりしに

『つきかげ』昭和二十四年
である。これは三ヶ月近くの間箱根強羅の別荘に滞在し

ていた時の作である。昭和二十八年二月に七十二歳で没する茂吉にとってはこのとき晩年の六十八歳であった。歌に「長き年月かへりみざりしに」とあるように茂吉は蝶を意識して詠んでこなかったのであろう。しかし、年老いて蝶の懸命な飛翔に心を打たれたのであろう。甘美さのない落ちついた写生というべきであろう。

この箱根滞在中には、「東京のあつき日ざかりのがれ来て強羅の山に老い呆けむとす」「青き山ふりさけ見つつその山の薄うすなみよるさま遠きかも」「ひぐらしのこゑのむらがるゆふまぐれこの山の家に身は老いてをり」など一四〇首近くを詠んでいる。

アララギの木この木垂るまで繁りたり曇りの下の墓石の翳 昭和四十三年

亡き人の跡に來りて今日見れば曇りは高く蔵王さやけし
その母を焼き給ひける跡どころ畔をへだてて吾は見しのみ

茂吉の故郷・山形県金瓶での歌である。一首目は茂吉の生家隣の宝泉寺境内に建つ茂吉の墓を詠んでいる。墓の横にはアララギの木を植えてあり、それが十五年あまり経って大きく繁り枝が垂れるほどになっているというのである。仰げば、茂吉が子供のころから眺めていた蔵

王が高く聳えているというのが二首目である。

三首目は茂吉の母を火葬にしたその跡を田の畔の向こうに見ただけだったというのである。母を焼いた大正二年のその場所を茂吉は「死にたまふ母」の中で、「どくだみも薊の花も焼けあたり人葬所の天明けぬれば」と詠んでいる。

宝泉寺境内には「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」を刻んだ碑が、火葬場跡には「灰のなかにははをひろへり朝日子ののぼるがなかにははをひろへり」を刻んだ碑が建っている。いずれも「死にたまふ母」の中の絶唱である。

茂吉偲ぶ縁に來り雪解水ゆたけき川にしばし真向ふ

昭和四十八年

濁りつつみなぎる春の最上川茂吉を偲ぶ今日のつど

ひに

茂吉住みし聴禽書屋も過ぎゆきてただに出でたり大

川の辺に

最上川で知られる大石田町は茂吉の歌集『白き山』の舞台である。ここでの茂吉を偲ぶ会はやはり最上川が話題になるのである。三首目では、茂吉の住んだ聴禽書屋は道すがら横目に見るだけで最上川の岸辺に向かったと詠んでいる。

齢やや同じからむに思ひ到る「大石田の茂吉先生」と吾と
昭和五十二年

よろよろと着物乱して立ち給ひき病める先生を大石田に見き

茂吉が第二次世界大戦中に疎開していた金瓶から敗戦後に大石田に移居した昭和二十一年、仙台から訪ねたことがあり、思えば今自分はその時の茂吉の年齢に近いのだというのが一首目である。「大石田の茂吉先生」というのは、大石田で茂吉の身辺の世話をした板垣家子夫が、歌誌「群山」に連載していた文章の題である。

二首目は、大石田に初めて訪ねたとき茂吉は病の身であって、病人らしい姿で迎えてくれたのだったというのである。

「大石田の茂吉先生」後何回ぞ手のつづく限り君書
き給へよ

右に述べた板垣を励ます歌である。板垣の茂吉詠については本誌二〇一五年二月号から八月号までにわたり述べておいた。板垣が『斎藤茂吉随行記』をはじめとする膨大な記録を長年にわたって記述することができた背景には扇畑忠雄の励ましと協力があつたと思われる。

楽しい時間 58

山本紀久雄

2017年7月31日

三遊亭円朝像…その七

円朝を検討していて分かってきたことがある。円朝の代表作に「塩原多助二代記」「塩原多助後日譚」があつて、それを読んでみると、というのも円朝の声は聞こえないからである。

円朝が逝去したのは明治33年だから、今から117年前、その翌年にイギリス・グラモフォン会社の技師が来日し、東京で宮内省の雅楽、梅若万三郎の謡曲、芳村伊十郎の長唄、常磐津などを蓄音機用として、日本ではじめての録音をした。円朝が存命であつたならば、多分、その知名度から鑑み録音されたのではないかと推測する。

いずれにしても、日本で声・音が録音として記録化されたのは、今から116年前であるから、1年というわずかな差で、円朝の声や口演が今日に遺されていないのである。とても残念だが、仕方ないので作品を読むしかない。

読んでいるうちに分かってきたのは、円朝は「日本人に何かを教えようとしている」ということである。つまり、寄席に来ている人びとを客とは見ていなく、ひとり一人の日本人へ伝えたいことを語っているのではないか、ということである。

「塩原多助後日譚」の中に、鉄舟の指導を受けたことを述べている文章に出あうことができた。こういう言葉を落語として話すのだから、当然に教訓的である。

《円朝が深く、鼻屑を戴いた山岡鉄舟先生が常々教訓のうち、人の幸福はともに喜び、人の困難はともに憂ひ、自他の別なく心の平等なる人を神とも仏ともいふと仰せられました。この塩原多助は奉公人でも主人でも自他の別なくその憂ひはともに憂ひますので不識々天の恵を得て僅のうち名高い金持になりました》

芸能史研究家の倉田喜弘氏も述べている。（『円朝の世界』文学増刊2000年9月）

《塩原多助後日譚》を読んで、円朝観は一変した。主人公の多助は、円朝その人ではないのか。山岡鉄舟に禅を学んだ円朝が晩年に到達した境地、それが「後日譚」に結実している。理屈はさておき、まず読んで頂きたい。円朝は凄い。そう叫びたい衝動にかられるのは、わたくし一人ではあるまい》

皆さんも機会があつたら読んで頂きたいと思う。
さて、この間立川志らくの独演会に行ってきた。会場の池袋・東京芸術劇場のプレイハウスは客席数834席、それが満席だった。

円朝を検討し始めて一年、随分と人気の落語家の断を聞いた。春風亭小朝、三遊亭円楽、林家木久蔵、柳家喬太郎、桃月庵白酒、春風亭之輔、それと今回の立川志らく。

いずれも上手く、素人の身で評論などは出来ないが、共通しているのは「まくらに振る」話が面白いことであるが、今回の立川志らくのまくらは秀逸だった。

今の政治情勢を語り、話題となつている政治家を粗に乗せることで笑いをとり、東京芸術劇場のプレイハウスが満席となつている背景まで語ったが、この志らく、この間まで日経新聞夕刊

のプロムナードで6か月間、毎週二回コラムを連載していた。

円朝落語は「日本人に何かを教えようとしている」と述べたが、志らくのプロムナードを改めて読んで、円朝に通じるものを感じた。そのつを紹介しよう。

「馬鹿論 立川志らく」2017年6月17日

《馬鹿は隣の火事より怖い》。師匠談志が良く言っていた言葉だ。談志の知人宅が火事に見舞われた事があった。隣家からの貫い火だったのだが、その隣人が大変な馬鹿だったとの事。馬鹿は隣の火事より怖い、その馬鹿が隣に住んでいた、という落ち。談志は馬鹿の定義を「状況判断が出来ない奴」としていた。今風の言い方をすれば空気が読めない奴。私は更に「己を否定できない奴」が馬鹿だと思う。馬鹿な奴は間違いなく他者を否定して己を肯定する。

私の弟子の中で辞めていく者が沢山いたが皆そうであった。落語界がおかしい、師匠の教え方が酷い、兄弟弟子に馬鹿がいる、云々。あつているところもあるのだが、こういう連中は常に世の中のせいにする。自分はこんなに頑張っているのにと嘆く。その頑張りが世間のいう頑張りには到底行き着いていないのに。当人は小さなコップの水を溢れさせているから頑張っていると主張するが、世間の頑張っているというのは大きなプールの水を溢れさせる事を指す。他者を否定して自分は間違っていないと思ひ込み、ここは自分があるべき場所ではないと快適な場所を求めて辞めていく。

言っておくが若者にとって快適な場所なんかろくな場所ではない。不快に決まっている。利口な人間は不快な場所を快適にしようとして日々生きているのだ。まず自分は間違っているのではない

かと疑う。何故ならばその空間はすでに成立しているのだから。勿論、悪がはびこっている場合もあるがそれを変えるために改革をしていくのだがそれはまた別の話。自己を否定して他者を肯定してはじめて人は前進できる。例えば小津安二郎の映画を若者に見せたとき。退屈に感じるだろう。そこでこの監督はつまらない映画を作るんだ、たいした監督ではないと己の感性を優先して小津を否定したら。

先人達が評価してきたにもかかわらずそれは無視して己の判断を正しいと思う怖さ。馬鹿な奴はその連続、積み重ねで歳を重ね、結果もののわからない馬鹿の塊と化する。沢山いるよね、自分の意見こそ正義だと主張する人。自分は未熟でまだ小津を理解する知識も経験もセンスもないと思う事が進歩の第一である。私は絵画が好きだが未だにピカソの魅力がいまひとつわからない。だからといって、ピカソはたいしたことはないと言ったら笑い物だ。まだ絵を観る能力が未熟なだけである。勿論好き嫌いは別。

ついでに言うとならば自分探しの旅に出る、なんて事を言うが、私は言いたい、旅なんぞに出るな。若いうちは空っぽなのだ。空っぽの奴が自分を探しに行つたつて何にも見つかるはずもない。旅に出る前にちゃんと支度をしなさい。つまり沢山の物を吸収してそれから自分探しの旅に出なさい。あと、馬鹿の怖いところは聞く耳を持っていない。いくらこちらが理路整然と懇切丁寧に話してもわからない。それは理解する能力を持っていないと自己を否定できないからである》

なるほどと思える教訓的内容である。とういうことで今回は立川志らくで終わりました。

漢詩研修 (十一)

千代田岳精会 平井茂行

烏衣巷

劉禹錫

朱雀橋辺野草の花

烏衣巷口夕陽斜

旧時王謝堂前の燕

飛入尋常百姓の家に入る

朱雀橋邊野草花

烏衣巷口夕陽斜

舊時王謝堂前燕

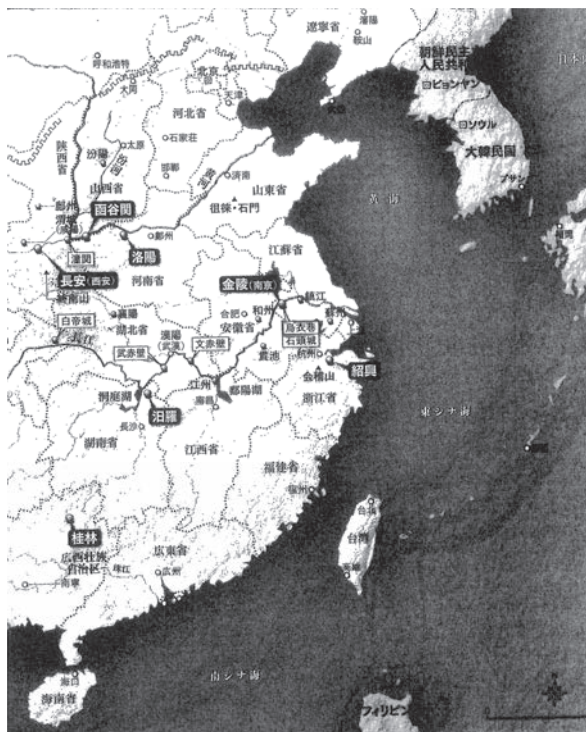
飛入尋常百姓家

【作者】劉禹錫（七七二〜八四二）字は夢得。洛陽（河南省）の人。自ら中山（河北省定県）の人と称した。貞元九年（七九三）、進士に及第、その後同年の進士 柳宗元とともに王叔文の政治改革に加わった。しかし叔文の失脚に伴い、永貞元年（八〇五）、地方に左遷、十年後に長安に復歸したが筆禍事件によりまた左遷されて各州の刺史を歴任、その後、太子賓客となり檢校礼部尚書を加えられた。晩年には洛陽に住んで白居易と交遊し、唱和の作を多く残している。『劉夢得文集』（劉賓客文集）がある。

【語釈】 * 烏衣巷：…金陵（六朝時代は健康といった）の町の名。もと、三国時代呉の烏衣營のあったところという。東晋以後、王氏、謝氏のような貴族の住居がここに構えられた。王謝の子弟がここで風雅の遊びをしたのを「烏衣之遊」といつてもはやした。一説に、王謝の子弟が烏衣（黒衣着物）を着て遊んだので烏衣巷の名がついたというのは、原因と結果を逆にした俗説である。 * 朱雀橋：…朱雀門（都の南門）の外、秦淮にかかっていた橋。烏衣巷の入口になる。 * 王謝：…南朝最大の貴族、瑯琊（山東省）出身の王氏と陳郡（河南省）出身の謝氏。王氏の中心人物は王導（二七五〜三三九）謝氏の中心人物は謝安（三二〇〜三八五）、ともに東晋王朝の大立て者であった。

【通釈】 かつては都の貴族たちが袖をひるがえして往來した朱雀橋のあたりに今は名もない野の草花が咲いている。王、謝など大貴族の邸宅が軒を並べた烏衣巷に、夕日が斜めにさしこんでいる。その昔、王、謝の邸宅に巢を作っていた燕が、今は普通の庶民の軒先に、飛んではいつてゆく。

岳精流日本吟院教本



植物の力(1) 夏目勝弘

植物は動けない、移動は鳥や昆虫や風等の他に頼るしかない。

46億年の地球の時間のなかで、陸上植物は5億年を生き延びた。この長い時間のなかで、生存しつづけるために、長い進化の過程をへてきた。その力とはどんなものであろうか。

今回は我が家にとつた二本の立木であるネムノキについて調べてみた。

芭蕉の句に(象潟や雨に西施がねぶの花) 奥の細道を辿り象潟を巡つたのは、二十年前。

象潟にネムノキが多くあつたのは、防災林として古から使われてきたためとか。

塩害に強く、やせ地に強いという性質があるためであった。

我が家の瓦礫の土地に、知らぬ間に一本のネムノキが生え、たちまち大きくなってしまった。(渡辺二夫著・樹木19種の個性と生き残り戦略) よりネムノキのことを調べてみた。

ネムノキという名の理由に二つあり、その二つに、冬の間は葉を落して休眠している。春になってほかの樹が葉を開き始めてもまだ眠つていて開葉せず、ひと月ぐらい遅く葉を開く、春の開葉が遅いから「ネムノキ」となった。と

○さ庭べに最もおそく芽吹きたる合歓によるしき五月雨降る

(中村憲吉)

五月中旬になつても、若葉はまだ半ば、早く葉を付け長い間光合成し成長を促がした方が得なように見えるが、ネムノキはそうではない。

ネムノキは若木の成長が早い先駆種であり、葉の生産能力が高いので、葉が開くのが遅くても、十分な生産を達成できる。

ネムノキは夜に葉を閉じるが、日中でもアルミホイルで葉を遮断すると葉を閉じる。

ネムノキの就眠運動は暗くなると葉をたたむという単純なものではない。

ネムノキの就眠運動は、人間と同じ、起きる眠るの二日のリズム(概日リズム)が存在している。これはネムノキ自身がついてる体内時計である。

なんのために葉をたたむのか、一つには乾燥よけ、二つには体内時計によつて、一日のリズムをもっている。夜になると眠つて一日のリズムを保つことは重要なことである。

人間もまた一日のリズムを保持することが大切である。生きていくことにおいては、植物も人間も同じである。

○河の上の稚き合歓の葉くもり日の夕かたまけてすでにねむりぬ(鹿兒島寿蔵)

ネムノキの花は、ブラシ状の独特な花で色も淡いピンク色。中国の絶世の美女の西施と重ね併せたのが芭蕉の一句である。

花には、虫を呼ぶような目立った花弁がなく、そこで色鮮やかなオシベをブラシ状につけ虫を呼ぶ。ブラシ状の毛はほとんどオシベで、そのなかに何本かのメシバが混んでいる。

ネムノキの蜜はオシベが束になった頂生花のみにあり側生花にはない。

オシベには虫が止る所がないため、ホバリングをするスズメガしか蜜を吸うことができない。

○吾妹子が形見の合歓木は花のみに咲きて蓋しく実にならじかも(巻八1463大伴家持)

昨年の我が家のネムノキにも莢実が二つ付いていたのみであった。ネムノキは果実であり、風で飛ばすか、河原の場合は流れにより遠くまで散布する。

「氷魚」のことから (200) 岡本八千代

梅雨が明けたというに、東北地方、九州地方は濁流や大風に悩まされている報が―。

それなのに今、私の籠り部屋の東の窓からはうつすらとした陽がさしてくる。ここで、「氷魚」二百回を書くことができる。その運命の不思議さに感謝しつつ書こうとする。

今回は、漱石の「木屑録」の中の「古詩」について読んでみる。子規が感心したという「鋸山」と日本寺を詠んだ作。

一段落、鋸山如鋸碧崖きざん 鋸山鋸きざんの如く、碧崖きざんたり

上有伽藍倚曲隈かま 上に伽藍の曲隈に倚れる有り

山僧日高猶未起やまそう 山僧日高くして猶未だ起きず

落葉不掃白雲堆らくよく 落葉掃わず白雲堆うすたか

吾是北来帝京客われ 吾は是れ北より来たりし帝京の

客

二段落、登臨此日懷往昔とうりん 登臨して此の日往昔を懐おもう

咨嗟一千五百年そうさ 咨嗟す一千五百年

三段落、十二僧院空無迹じふにそうえん 十二僧院空しく迹あと無し

只有古仏坐磅礪ただ 只だ古仏の磅礪に坐せる有りて

雨蝕苔蒸閔桑滄あめ 雨蝕み苔蒸して桑滄そうそうを閔あはす

似嗤浮世榮枯事にせい 浮世榮枯の事を嗤わらうに似て

冷眼下瞰太平洋れいがん 冷眼下し瞰る太平洋

△第一段落は、鋸山の上にある「伽藍」が日本寺である。寺が荒れはてて僧もいないまま放置されている。

△第二段落は、日本寺は行基が神亀二年に創建したと伝えられている。漱石が訪ねた時まで千百余年だが、「一千五百年」は誇張していったもの。

△第三段落は、著名な五百羅漢を詠っている。「おしまいの冷眼下し瞰る太平洋」とあるところ、保田の海を描写したおしまいにも『長風吹滿太平洋』とある処があった。いずれも最初読んだ時には笑ってしまった」とある。(漱石の夏やすみの著者。高嶋俊男氏なぜ笑ってしまったのか？氏は、『太平洋』を見た途端の反射的行動で、ここになん

ら思慮ははたらいっていない」と。また、「支那詩は中古漢語(六朝から隋唐にかけての支那語)の音韻でつくる。これは千数百年来今日に至るまで、不変の規則である」と。

―。

不変の規則で歌ってきて、二詩ともおしまいに『太平洋』が出てきたことで、「笑ってしまった」というわけである。支那の詩人たちは「海」とは縁が無かったようである。支那の詩には、川や湖は出てくるが海はまず出てこないそうだ。

見たことがないのだから海を幻想的にとらえているらしい。漱石の詩のおしまいの『太平洋』は、その名の如く平和な海であって欲しいものだ。しかし、自然には勝てないことを思いながら―。次回へ。

「歴代天皇御製歌」(八十)

貫名海屋資料館

「仁孝天皇」第二百十代・在位一八一七年(十八歳)——一八四六年(四十七歳)

仁孝天皇は、光格天皇の第四皇子。父子一体、幕末の危に立ちむかわれた。当時国内の政治は乱れ、外には外敵の危急。将軍、家斉は、江戸に居たまま詔を受ける無礼を行い、幕府崩壊に至る契機を生んだ。

英国船が江戸近く浦賀に到来。ドイツ人、シーボルトが長崎に。英船が宝島に。幕府は「外国船撃攘の令」(異国船打拂令)を出した。

アメリカ船モリソン号の来航、高野長英、渡辺華山ら処罰。阿片戦争により清国はイギリスに屈し南京条約を締結。オランダ国王が使者を派遣し、鎖国を解除すべきこと。西欧諸国の情勢を知らせくる。いよいよ幕末の動乱に至った。

言の葉の世々のさかえに松が枝もなほいろまされ九重のには 松添栄色 (十八歳)

むかしま栄ゆる道はしきしまの大和もろびといはふ言の葉 祝 (十九歳)

雪の色も霞むと見しは小野山にやく炭がまのけぶりなりけり

寄世祝言 (二十歳)

四方の海をさまる世とて國つ民にぎはひうたふ聲もゆたけし

御会始 (二十歳)

岩戸あけし神代おほえて天つ空日がけうちらに春は来にけり

立春天 (二十二歳)

天照らすかみのめぐみに幾代々も我があしはらの國はうごかじ

神祇 (二十六歳)

いつしかと三十年みそとせ近くなりぬれど世をしるのみの身ぞおほけなき

述懐(四十六歳・崩御)

編集室だより【二〇一七年七月】

○漢詩、漢文：とは、日本語の「元」なのだから。いとも簡単に理解出来る、と思っていた。

「音」として聞いたことも、自身から発したこともない「韻をふむ」という決まりがあり、「何々式」とか、「和語」は使うな「今はこの世に使われなくなった漢字」でなくてはいけないという。普通に生きてきて、「そんなことがスラスラ理解出来る訳がない」と私が解釈することが、ドサツと押しよせ、これはとても無理、係わらないのが一番利口な方法と思ひ至る。日本語の「元」がわからなくて、「そのまましておく訳にはゆかない」と思いとどまり「漢文、漢詩系の本が積みあがってゆく。せめて、「自作の一篇の漢詩」を「自身で吟じる」そこまではやってみよう。

○中野区立「哲学堂公園」吟行。

現東洋大学創立者の井上円了先生の「精神修養の場」として、哲学世界を表現されている。

「四聖堂」には、ソクラテス、カント、孔子、釈迦が祀られ、あまりにも深い方々を身近に感じ、思いを馳せる場所。

○孔子曰く「学びて時に之を習う。亦よろこばしからずや」この論しを、「時習館」と名付けた高校に通ったことを、思い起す。

「知らざるを知らずと為す、是知るなり」

君子の九思（こころがけることの九つ）

①物を見るときは、はつきり見る。

②聞くときは誤りなく、しつかり聞く。

③表情は、おだやかに。

④態度は、上品に。

⑤言葉は、誠実に。

⑥仕事は、慎重に。

⑦疑問があれば、質問する。

⑧みさかいなく怒らない。

⑨道義に反して利益を追わない。

○ソクラテス（古代ギリシャの哲学者）

「神のみぞ知る」

「知っていること、知らないこと」

「知り得ること、知り得ないこと」

「人間としての、分をわきまえつつ、最大限善く生きようと努める」

○イマヌエル・カント（プロイセン王国の哲学者）

「感覚を通じて得た経験から、存在を認識させてくれるのは理性のおかげなんだ」

「あらゆる宗教は、道徳をその前提とする」

「互いに自由を妨げない範囲で、わが自由を拡張すること、これが自由の法則である」

○釈迦の教え「幸せになる方法」

「心正しく、素直な心を持てば幸せになります」

「苦を認識することで、小さな喜びにでも幸せを感じます」

「人に迷惑をかけなければ、何をしても良いのです」

「心を養う場」の真情を、自身なりに解釈し、新しい自身を得たような…幸せな気持になっている。

野菜の花（15）

鈴木孝雄



○ 万願寺とうがらし

4年前まだ田舎のスーパーでは売ってなかったので、苗を求め畑で栽培を始めた。4月下旬に植え付けると、5月には白い可憐な花が咲き、6月待望の実を初めて味わった。赤味噌を付けて艶やかな緑の実をそのままかぶりついた、その味は忘れられない。シャキッとした歯ごたえ、独特の味の口の中への拡がり、そしてすっきりした後味、まさに「とうがらしの王様」だ。

興味を持ったのは、まず「万願寺」というお寺さんの名前。調べてみると、京都府舞鶴市万願寺地区の特産品とのこと。市とJAの公式ウェブページ「万願寺甘とう解体新書」は一読の価値あり。大正年間、伏見とうがらしと北米原産のカルフォルニア・ワンダーとの自然交配で生まれ、一人の農婦から万願寺地区約30軒の農家が種をもらい、営々と育てた品種が固有の在来種として認知されるに至った。現在は京都府の「京の伝統野菜」に準ずる野菜に指定されており、「万願寺甘とう」がブランド名である。

とうがらしは辛味種と甘味種に分類され、前者は鷹の爪に代表される辛い唐辛子、後者はピーマン・パプリカ・シシトウに代表される辛くない唐辛子。ただクリアカットでないのは、シシトウはたまに辛い実に当たることがある。万願寺とうがらしは安心で、辛い実に今まで会ったことがない。

唐辛子は漢字名からすると中国原産のように見えるが、実は中南米原産。英語のチリペッパー (chili pepper)の語源にまつわる歴史は実に面白い。野菜作りは知識の栽培でもある。

次回はエゴマの花の予定です。

お知らせ

△十月号の原稿は、八月三十一日（木）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月原稿の返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaiizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美